



アスぺン訪問を通じて
トナム学校8年 関谷 壮恭

僕は占冠村の交換留学プログラムで、アメリカ・コロラド州アスぺンに行ってきました。初めての海外で、期待と不安が入り混じる中での出発でしたが、この経験は僕にとって一生の宝物となりました。

アスぺンに到着してまず驚いたのは、街の雰囲気の違いです。山に囲まれた自然豊かな場所という点では占冠村と共通する部分もありましたが、街並みや建物のデザインはまるで映画の中の世界のようでした。また、人々はとてもフレンドリーで、僕たちを温かく迎えてくれました。特にホストファミリーは親切で、英語が得意でない僕にも分かるようにゆっくり話してくれたり、日常生活の中でアメリカの文化をたくさん教えてくれたりしました。

学校生活では、日本とは違う授業のスタイルに驚かされました。授業中の発言がとても自由で、生徒たちは積極的に自分の意見を述べていました。最初は緊張してしまいましたが、クラスメートたちが優しく話しかけてくれたおかげで、少しずつ英語を使ってコミュニケーションを取れるようになりました。また、授業以外にもスポーツやアクティビティが充実していて、特にスキートの授業はとても楽しかったです。アスぺンは世界的に有名なスキーリゾート地であり、レベルの高い環境の中で滑ることができたのは貴重な体験でした。

食文化の違いも印象的でした。ハンバーガーやピザなどおいしかったですが、一番驚いたのは量の多さです。日本では一人前の量でも、アメリカでは倍くらいあることが普通で、最初は食べ切るのが大変でした。けれども、次第に慣れてきて、現地の食文化を楽しむようになりました。



アスぺン中学生短期交換留学事業(派遣)参加報告

1月5日から15日までの間、姉妹都市である米国コロラド州アスぺン市との国際交流事業「アスぺン中学生短期交換留学事業(派遣)」が行われ、村内の中学生および後期課程生がアスぺン市を訪問しました。また今回は、コロナ禍でアスぺン市を訪問できなかった高校生のほか、職業交流として一般住民の参加もありました。参加者たちはアスぺンの地でのどのようなことを学び、経験してきたのでしょうか。それぞれの感想についてご紹介します。

【参加者】
中学生・後期課程生3人
高校生1人、一般参加者4人
引率者4人

アスぺン交流の学び

占冠中2年 伊達 充寛

僕は、今回のアスぺン交流を通して異国の人との関係について学びました。

あくまで、アスぺンと占冠村の姉妹都市の関係ですが、どちらにも温かさや優しさを感じました。アスぺン生が占冠村に滞在した10日間、僕たちはアスぺン生を優しく迎え、共に生活しました。話す言葉も習慣も異なる人たちと同じ環境に置かれると緊張するでしょう。しかしながら、伊達家が迎えたアスぺン生は、僕たちが全て英語で合わせようとしなくても、下校中に競争したり、家に帰ってゲームをしたりすることで仲が深まりました。僕はアスぺン生が日本に来る前に、あらかじめ話すことを考えていました。来るアスぺン生は2人

なので、会話に入れてもらえなくなる不安を感じていたからです。それでも、言葉の壁を越えて仲良くなる事ができてうれしかったです。僕がアスぺン市に滞在するときも、僕たちがしたように優しく迎えてくれました。滞在中もホストファミリーは、アレギーの心配をしてくれたり、何かを伝えるときもゆっくり分かりやすい英語で伝えてくれました。まるで本当の家族のように接してくれて幸せでした。僕のホストファミリーのアルフレッドは分からないことはすぐに教えてくれるし、僕の代わりにたくさんのお話を引き受けてくれて頼もしかったです。それと、伊達家が迎えたもう1人のアスぺン生のスペンサーのホストファミリーの家には、アレギーの問題があつて行けませんでした。時々スペンサーは家に遊びにきてくれました。

僕たち日本人に親切にしてくれたのはアスぺンの市民も同様です。会話のときは、僕の英語をしっかりと聞き取ってくれるし、日本のことに興味を持ってくれました。困っているときもすぐに助けてくれました。セルフレジの使い方が分からないときや、小銭をばらまいたときも即座に動いてくれました。他国の人を受け入れる心と、困っているときに助ける優しさは日本もアスぺンも変わらなかったです。だからこそ、自分が慣れない環境に身を置かれても楽しく過ごせたのだと僕は理解しました。

さまざまな人のおかげで僕たちはアスぺンに行っているいろいろなことを学ぶことができました。僕は、これからいろいろな国の人と交流を深めていきたいと思いました。本当にありがとうございました。



二つ目は物価が高いということです。アスぺンでは、マクドナルドではないのですが、ハンバーガー屋さんでチーズバーガーを頼んだとき、1個22ドルと、日本円で約3300円します。とても高いですね。

三つ目は日本のお菓子のレベルの高さです。日本にはさまざまな種類のお菓子がありますが、アメリカにもさまざまなお菓子がありません。アメリカには、例えば、アメリカのお菓子は味が極端で、舌がヒリヒリしてきます。それにプリングルスというお菓子は7ドル、日本円に換算すると約1050円と、一つのお菓子が1000円を超えるのは今までの買い物で一度もないので、とても驚きました。それにお菓子は食べたときには甘すぎて糖尿病になってしまうのではないかと、甘くないかと思うくらい甘かったです。安くておいしいお菓子が食べられるので日本の方が優れていると感じました。

長年暮らしていても、実際に海外に行ってみないと分からない日本のいいところを認識できて、自国愛がより一層強くなりました。ですが、アメリカの肉の柔らかさには驚いたので、お肉が大好きでいっぱい食べたいという人は一度食べにアメリカ・アスぺンへ行くことをお勧めします。

アスぺンで学んだこと

占冠中3年 鈴木 楊生

私がアスぺンに行つて学んだことは三つあります。

一つ目は日本食のレベルの高さです。アメリカのご飯は、主菜、副菜などはなく、主菜だけで、米などの主食は

なく食べています。なので、口の中が常にギトギトになります。そして量が多いので満腹になることができます。それに、食べたいものを食べるので、栄養バランスが偏り、ずいっと食べていると間違って太ります。その反面日本食は味や栄養がそれぞれバラバラで、主食があるので口がギトギトしてきてもお直しすることができません。それだけでなく日本食は調味料も多く使うため味に奥深さが出て大変おいしいです。そのため、帰国時に自分は日本に生まれて恵まれていると感じました。



アスペン交換留学を通して

伊達 結月

今年1月、私は占冠村の姉妹都市であるアメリカのアスペン市の10日間の交換留学に参加しました。私は海外経験がなく、今回の交換留学で初めて外国へ行きました。

アスペンでの滞在中は主に、現地の小・中学校や高校を訪問しました。アスペンの学校は日本とは授業スタイルが異なっていて、子どもたちも先生も私服だったり、飲食物の持ち込みが許されていたりして自由度の高さを感じました。また、アスペンでは児童や生徒が積極的であり、先生方も子どもたちのそれぞれの考え方を大切にしているんだなと思いました。保育所や幼稚園のような場所でも電子黒板に似たものが使われてい



たり、生徒たちがパソコンを持っていたりICT化が進んでいるなど感じたのも記憶に残っています。

次は、アスペンの食べ物についてです。アスペンの食べ物には大きいものが多く、一切れで顔の大ききくらいあるピザもありました。ハンバーガーやパン、シリアルやフレンチトーストなど、どれも本当においしかったです。

学校訪問の日以外は、みんなで購入物に行ったり、ホストファミリーとお出かけしたりしました。アスペンのお店には見たことのないものばかり並んでいて、なんとなく店内を歩くだけでもとても楽しかったです。

アスペンに行く前は、「言いたいことが伝わらなかったらどうしよう」「知らない間に失礼な英語表現を使ってしまったらどうしよう」といった不安もありました。しかし、ホストファミリーだけでなくアスペンの人たちはみんな本当に優しく、不安に思う必要なんて全くありませんでした。私は中学2年生の頃に新型コロナウイルスの影響でアスペンへ行くことができず、この機会に、この取り組みに参加させてもらえたことに本当に感謝しています。これからも占冠村とアスペン市の交流が続いていくことを願っています。

アスペン訪問を通じて

川口 晃平

はじめに、このたびはアスペン中学生短期交換留学事業の訪問団として参加させていただきましたことに対して、関係者の皆さまをはじめ、村民の皆さま、送り出してくれた家族に感謝いたします。

占冠村およびアスペン市の各中学生が異国の地に不安、期待、緊張などさまざまな思いを抱えて旅立ち、達成、満足、安堵の感情へと変化して帰国するまでの体験を共有できたことはとても大きな経験となりました。

私のホストはウォードさん（アスペン市議員として姉妹都市提携30周年記念事業で来村）であり、交流事業への理解があったこと、多くの事前情報があったことによりとても安心して訪問ができました。何よりもご家族の心温まるおもてなしが私のアスペン滞在をより思い出深い経験とさせてくれました。また、多くのアスペンファミリーとの再会も大変感動的なものでした。

中学生との学校訪問では、幼稚園児から高校生までと交流することにより、日本の学校生活との違いを体感できました。その他、私個人として、職業視察として市役所、通所事業所（高齢者）を訪問させ

たり、生徒たちがパソコンを持っていたりICT化が進んでいるなど感じたのも記憶に残っています。

次は、アスペンの食べ物についてです。アスペンの食べ物には大きいものが多く、一切れで顔の大ききくらいあるピザもありました。ハンバーガーやパン、シリアルやフレンチトーストなど、どれも本当においしかったです。

学校訪問の日以外は、みんなで購入物に行ったり、ホストファミリーとお出かけしたりしました。アスペンのお店には見たことのないものばかり並んでいて、なんとなく店内を歩くだけでもとても楽しかったです。

アスペンに行く前は、「言いたいことが伝わらなかったらどうしよう」「知らない間に失礼な英語表現を使ってしまったらどうしよう」といった不安もありました。しかし、ホストファミリーだけでなくアスペンの人たちはみんな本当に優しく、不安に思う必要なんて全くありませんでした。私は中学2年生の頃に新型コロナウイルスの影響でアスペンへ行くことができず、この機会に、この取り組みに参加させてもらえたことに本当に感謝しています。これからも占冠村とアスペン市の交流が続いていくことを願っています。

アスペン小学校での経験

小野 研吾



今まで私はアスペンとの姉妹都市事業について、保育所に交流会としてゲストが来園する程度でそれ以外に関わる機会が皆無であったため、どこか他人事のように思っていました。しかし、今回ありがたいことに受け入れと派遣の機会をいただけることになりました。

一人暮らしの自分がゲストを迎えるということに不安はあったものの、周りの方々の支えもあり何とか乗り越えることができました。年明け早々に訪問したアスペンでは、3日間アスペン小学校の幼稚園とプリスクールでボランティアの機会をいただきました。

自分の町を愛する気持ち

田中 達子

この10日間、私はグラフィックデザイナーや建築家、美術館のキュレーターの方々など、多種多様な業種のクリエイターの方々と交流できる貴重な機会をいただきました。お会いした方々は皆、自分の仕事や町の文化に誇りを持ち、生き生きとしていました。

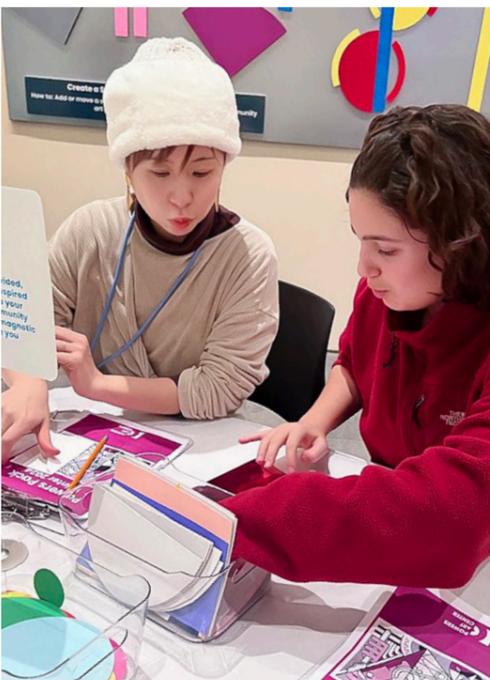
その姿に刺激を受け、私も自分の村で何ができるのかを改めて考えるきっかけとなりました。今回の滞在では、以前ホストファミリーを務めた際にご縁があったオリビアさんのお宅にお世話になりました。日本滞在中とはまた違う家族との過ごし方を見ることができ、より親密な関係を築けたことを大変うれしく感じました。

滞在中、特に印象的だったのは、子どもたちが芸術や音楽、映画といった文化に日常的に触れている環境です。アスペンにはアートや文化を築き上げる場所が多くあり、それらが子どもたちの身近な存在になっています。こうした環境が、子どもたちの感受性や創造力を育むのだと実感しました。また、アスペンの人々が自分たちの町に強い誇りを持ち、文化や歴史を大切

にしている姿勢にも感銘を受けました。地元のアートイベントやコミュニティ活動に積極的に関わること、町全体が活気づいているのを感じました。このような姿勢は、地域の魅力を高める上でとても重要だと考えます。

一方で、現地の建築家との対話を通じて、村の現状について考えさせられる場面もありました。私たちの村には、その方がデザインしたコミュニティプラザや街灯などの作品がいくつもあります。しかし当時そのプロジェクトに携わっていない世代の多くは、その背景やデザインの意図を知らない方も多いのではないのでしょうか。お話を伺うまでは、私もその1人でした。この事実を直視し、取り組みの一つがその後も語り継がれ

ていくには、どうすれば良いのか、課題の大きさを痛感した出来事でもありました。アスペンでのさまざまな経験を通じて、私は次の世代である子どもたちを筆頭に、村民の多くの人々が集えるような場所、「アートをもちと身近に感じられる環境をつくりたい」と強く思うようになりました。例えば、自宅以外の学校や職場の枠を超えて人々が集まれる「サードスペース」のような場をつくることで、できれば、住民同士の交流が生まれ、文化の活性化につながるのではないかと考えています。その実現のために、アスペンで学んだことを生かしながら、私の村でも新たな変化を生み出せるよう村の行政とも連携しながら、少しずつ取り組んでいきたいです。



初めての交換留学

有光 志穂

昨秋に、アスペン生のホームステイ先が足りないとのことでお声がけいただいた受入事業に参加したことが私にとってアスペンへの派遣に参加するきっかけになりました。この機会がなければ、中学生でもなくその保護者でもない私が姉妹都市交流事業に関わるチャンスはなかったかもしれません。ホームステイ先として事業に参加できたことは忘れられない経験です。我が家にホームステイしていたシリアにアスペン空港で再会したときはとてもうれしかったです。

渡航前からホストファミリーやALTのグレイソンが尽力してくれ、滞在中にはアスペンで2軒の羊牧場、農業用品店などを見学させていただきました。牧場では羊飼いの同士



とても話が弾んで時間があっという間に過ぎてしまいました。が、後に生かすことができる貴重な出会いとなりました。本当に多くのことがあった刺激的な10日間で、ホストファミリーと過ごしたアスペンでの生活、相手を思う感情を表現して素直な気持ちでコミュニケーションをすることの大切さ、言語や文化が違って同じものに興味を持つ者同士が過ごす時間の熱さ、占冠から一緒に過ごした皆さんと打ち解けて過ごした時間は交換留学という機会だからこそ得られた経験です。

今回、交換留学の対象となる生徒さんが少なかったため私も大人のメンバーとして派遣団に加えていただきアスペンへ行くことができました。このような形で派遣を実現するために多くのハードルがあったと思いますので、関わっていただいた占冠村の皆さん、アスペンの皆さんにとて

も感謝しています。また、今回の派遣は今まで知らなかったアスペンへの大きな親しみ「Friendship」としても私の心に残っています。今後もさまざまな立場の村民の皆さんがこのような機会を得て経験やアスペンへの親しみを共有することで、占冠村とアスペン双方にとってより充実した交流事業になることを願っていますし、私も自身の仕事やこの事業への協力を通して今回得たものを村へ還元していきたいと思っています。

アスペンを訪問して

トナム学校教諭（引率） 齋藤 陽樹

このたび、中学生短期交換留学事業のアスペン訪問に引率として参加させていただきました。ご支援いただいた多くのの方々により感謝申し上げます。

アスペンの教育施設を訪問して印象に残ったことは、日本の教育現場で求められる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実が図られていたことです。アスペンミドルスクールでは選択科目があり、「音楽」や「美術」などに加え、「飛行機の操縦」のように、日本の学校で一般的に扱われていない内容についても学ぶこと



姉妹都市の特別な絆

ALT（引率） グレイソン・パウアー

私が占冠に来てからの9か月間、占冠の皆さんは私にこの地域の人々や場所、行事、伝統を温かく紹介してくれました。そして1月、私はついにアスペンへの訪問団を案内することで、占冠に恩返しをする機会を得ることができました。私にとっては当たり前のことに興奮し、驚き、時には戸惑う彼らの反応を見てみると、おそらく占冠の皆さんも、私が占冠での日常生活をどう乗り越えるのかを見て、同様の面白さを感じているのだらうと思います。

今年度、占冠とアスペンの交流を最前線で見ている私にとって、双方の参加者が異国の地で目を丸くする訪問者と、知識豊富な地元の人の方を演じるのを見るのはとても楽しいことでした。最も印象的だったのは、それぞれのグループがお互いに寄せていた絶対的な信頼です。新しい



食べ物に果敢に挑戦したり、難易度の不確かなスキークーラスでもホストに案内されるがままについて行くなど、2024〜2025年の交換留学は、30年以上続いた国際交流の誇るべき伝統の上に築かれたものだと感じました。

これこそが、姉妹都市の絆を特別なものにしていただいているのだと思います。このような関係の多くは、産業や人口規模が似ているという程度のものですが、占冠とアスペンの結びつきは遥かに深いと感じます。お互いの山の故郷やライフスタイルへの愛情は、そびえ立つ言語や文化の壁に勝るものだと感じます。それぞれの多くの点において、地球の裏側に位置する私たちの二つのコミュニティは、お互いが所属する国よりも共通点が多いと思います。

この場を借りて、今年参加した派遣者のメンバーだけでなく、アスペンへの訪問事業を実現させてくれた教育委員会の皆さん、役場の皆さん、そして村民の皆さんに感謝いたします。



姉妹都市交流発展のために

教育委員会職員（引率） 渡邊 舞子

昨年に引き続き、引率としてアスペン訪問の仲間に加えていただきました。昨年は役場職員としてアスペン市と交流を深めるために、今年には教育委員会職員として短期交換留学を推し進める立場から参加させていただきました。

短期交換留学の本来の対象である中学生の数が減ったこと自体は村として寂しいことですが、一方で、この事業にさまざまな年齢・職業の方が参加していただき、11日間をともに過ごせたことは、国際交流のみならず、村民同士の交流にもつながったと感じています。

参加者の皆さんの様子を見ていて感動したことがあります。学生も大人も、臆せず状

ができます。その一つである「maker」という授業では、生徒たちが、個々の興味・関心に応じて自由に作品を創作していました。3Dプリンターやキャンパス、パソコンなど、さまざまな道具を駆使して取り組む姿は、とても生き生きと見えていました。カントリーデイスクールでは、設定された題目に沿って討論する授業を参観しました。英語の授業では「ニュースとはどのような内容の記事か?」、理科では「海の微生物が環境に与える影響」をテーマに意見を交わしていました。どの生徒も積極的に手を挙げ、熱心に語る姿から主体的に課題に向き合おうとする意欲が感じられました。アスペン滞在中は、多くの方々の思いやりに触れ、温かみを感じただけでなく、異文化交流を通して互いの考えを共有することもできました。アスペン市との交流事業は、現地の方が「prieloss」と表現していたように、遠く離れた国同士の人々をつなぐ素晴らしいプログラムです。今後も、微力ながら私にできることがあれば協力していきたいと思っております。ホームステイ実行委員会の方々を中心に村全体で継続・充実させていだけることを願っています。



況に刺さりこんでいたことです。この11日間で吸収できるものは全て吸収していくというエネルギーを感じ、30年以上を経てもなお、占冠とアスペンはまだまだお互いに学びあっていける関係であると感じました。「今後の姉妹都市交流は、村全体でもっと盛り上がるようにできれば。自分の村がアスペンとつながっていることを、より多くの方が感じられるようにできれば」というのが、今、私の中に強くある気持ちです。アスペンの街では、多くの人が私たちに積極的に声をかけてくれましたし、ミドルスクールでのよきこい発表時に

は、占冠にホームステイした子たちが自ら踊りに加わってくれました。「自分は占冠に行つて、そこに仲間がいるんだ！自分はこの人たちと関わりがあるんだ！」ということ、他の生徒たちに示したいという気持ちの表れだと感じ、うれしく思いました。単純な海外旅行では得られない経験ができることが、ホームステイや姉妹都市交流の良さであり、この事業に携わってくださる方が増えることは、村にとって大きな利益だと感じています。今後も姉妹都市交流が発展していくよう尽力いたしますので、ご支援ご協力をお願いいたします。



2月7日(金)、占冠村コミュニティプラザで報告会が行われ、本事業の参加者からアスペンでの貴重な体験のほか、食や文化の違いなどが報告されました。会場には保護者のほか多くの村民が集い、参加者からの報告に耳を傾けていました。